

第19号

2023年
2月発行

CONTENTS

データ駆動による課題解決型人文学へのアプローチ
国立情報学研究所 所長補佐

古典籍データ駆動研究センター長

大山 敬三 ①〜③

故きを温ねるために

国立国会図書館電子情報部電子情報企画課
次世代システム開発研究室

青池 亨 ④〜⑤

『国書総目録』と調査カード情報のデジタル化の展望

古典籍共同研究事業センター 特任助教

幾浦 裕之 ⑥〜⑦

日本古典籍研究国際コンソーシアムの
書誌学用語勉強会について

研究部 准教授

山本 嘉孝 ⑧〜⑨

くずし字華ざかり

古典籍共同研究事業センター長

山本 和明 ⑩

こんな古典籍があった!

『拠点大学等古典籍画像紹介』

⑪

トピックス

⑫

ふみ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」ニューズレター大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

データ駆動による課題解決型人文学へのアプローチ

国立情報学研究所 所長補佐
古典籍データ駆動研究センター長おおやま けいぞう
大山 敬三

二〇二三年四月、国文学研究資料館(以下、「当館」)に「古典籍データ駆動研究センター」(以下、「DDセンター」)が設置され、はや一年近くが経とうとしています。現在、当館で推進している「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」(以下、「歴史的典籍NW事業」)が二〇二三年度に最終年度を迎えることから、恒常的組織として設置されたDDセンターは、その後継事業である「データ駆動による課題解決型人文学の創成」の礎となり先駆けとなることが期待されています。とはいえ、スタートしたばかりで、まだまだ小さな組織ですので、DDセンターだけではその期待に応えられるものではなく、館内はもちろん、多くの関係諸機関のご理解とご協力が不可欠となります。

私はもともと情報学を専門とする人間ですが、DDセンターの設置と同時に、センター長の重責を担うことになりました。これも時代の趨勢とでもいうことでしょうか。就任後、国文学や古典籍について少しずつ教えていただいています。踏み込んで論ずるにはまだまだ勉強不足であり、本稿では情報学の視点から、私見を述べさせていただきます。

※

※

人文学であろうと何であろうと、データ駆動というからにはデータがあることが基本です。自然科学や工学、経済学などにおいて、データ駆動が先行している分野では、観測や実験などにおいて何らかの仕掛けを通じて大量に取得したデータが研究の推進力になっています。それに対し人文学の多くの分野は、人の営みを研究対象とするため、データ収集にも直接・間接に人が深くかわる必要があり、同じようなアプローチが取れる分野は、それほど多くはありません。

古典籍は幸いにも、紙を媒体としていること、当館や大学図書館等に大量の資料が整理して保存されていたこと、紙媒体を二次元カラー画像としてデータ化するための技術が成熟していて比較的容易に利用可能であったことなど、人文学の研究対象としては珍しくデータ構築の環境が整っていたといえます。そのため、大規模学術フロンティア促進事業に採択された歴史的典籍NW事業により、資源を集中的に投下して古典籍画像データベースを構築することができ、データ駆動研究のためのスタートラインに立つことができました。

これによって、誰もがコストをかけず、いつでもどこからでも古典籍画像を見られるだけでなく、IIIF（トリプルアイエフ）な

どの技術の助けを借りて、画像中の特定の領域を参照しながらネットワーク上で議論を交わすといったことも可能となりました。

また、並行して整備された日本古典籍くずし字データセットにAIを適用することによって、従来は困難であった古典籍画像中の文字を読み取るOCR技術の研究開発が大きく前進しました。大量の画像データに対する有効性は今後の検証が必要ですが、一定の品質の文字データが画像データとセットで利用可能になるのもそう遠くはありません。大量の古典籍の文字列検索や単語の統計処理が可能になれば、研究の効率や客観性を高めるのに有効でしょう。

一方、古典籍には描画など文字以外の情報表現も多く、これらにどうアプローチするかがもう一つの課題です。AIを使えば、画像データの中から人物や舟や月など手描きの描画を見つけ出すことは一定程度可能ですが、それには対象物ごとに相応の量の学習データを整備することが必要です。日本古典籍くずし字データセットの描画バージョンといったところでしょうか。ただし、くずし字の場合は一つの字形が表す文字は（ほとんどの場合）一意であり、文字の種類も限られています。描画の場合はそう単純ではありません。抽出する描画の対象や利用目的を明確にしつつ、できるだけ多くの研究課題で利用可能となるように学習データを設計することが肝要となります。

さて、ここまででは情報学の既存の成果を応用することでもかなりの程度、技術的に解決できると期待されます。しかし、文字データ（あるいは文字列データ）や描画データの検索や解析でできることには限界があります。そこで重要となるのが、国文学におけるデータ駆動研究を強力に推進するための研究基盤となるテキストデー

タの構築です。文章（あるいは文書）としての構造、さらには背景知識や解釈などの情報をテキストデータ化することが求められます。残念ながら、現在の情報学でできることはデータの入れ物と分析ツールを提供するところまでであり、データ本体の構築は情報学の人間が踏み込めない、その道の専門家の領域になります。

データ構築を限られた専門家の力に頼る以上、そこにアプローチするためには協働のための可能な限りの環境整備を行う必要があります。まずはテキストデータを活用したグッドプラクティスを積み重ね、その成果とともに方法論やプロセスも広く共有することにより、テキストデータ基盤の意義についての理解を広めることが重要です。同時にできるだけ多くの関係者が合意できる共通のデータ仕様を策定することも求められます。さらにはデータの構築と共有を学術的に評価する文化の醸成も欠かせません。これらを進めながら、協働と分担によりデータを蓄積していくことが現在取りうる唯一の道と考えています。

ところで、一步引いて見方を変えてみますと、古典籍画像データベースは、ある意味で展示室のガラス越しに古典籍を見せているようなものです。前述のような技術によって古典籍の紙面に表現された情報のかんりの部分が捕捉可能です。しかし、実物は、照明を変えたり光の角度を変えたりすれば違う表情を見せてくれますし、手に取った時の質感なども研究には重要な手掛かりになると聞きます。では、実物により接近するためのデータ駆動とするにはどうすればよいでしょうか。

そこで、DDセンターが取り組もうとしているアプローチの一つがマテリアル分析です。従来から遺跡や遺物を研究する手法としてマテリアル分析が広く用いられていますが、古典籍を対象と

した「マテリアルデータ基盤」を構築するとすると、規模の面でも質の面でも全く異なる様相を呈してきます。ここではその詳細を記すことはできませんが、今後、折に触れてご紹介していきたいと思っています。

もう一つ、忘れてはならないのが、国文学あるいは人文文学の研究者が持っている知識や知恵をいかに抽出して共有するかという課題です。歴史上の著名な学者などを対象とした研究は数多くあると思いますが、これを、現代の研究者にまで対象を広げ、準リアルタイムで半自動的に行うのが究極の姿です。もちろん、研究者に知識や知恵を書き出すようお願いしても不可能なことは明らかです。そこで現時点で考えられるのは、研究者の研究プロセスをデジタルプラットフォーム上に可能な限り記録しておくことです。それらをどう共有し、どう分析して知恵や知識を抽出するかは将来の課題となりますが、研究活動と同時進行的にデータを残していくことがその基礎となると考えています。研究者の抵抗感も大きいでしょうが、自身にも十分メリットがあることを示せば、意識も変わるものと期待しています。

最後に、表題に掲げた「課題解決型」についてですが、データ構築に人手のかかることが多い人文文学においては、課題ごとにデータを構築するのは非現実的、かといって具体的課題を想定せずに意味のあるデータを構築できる領域は限られています。このジレンマの解決は、分野を超えた連携の中で考え続けていくしかないさそうです。

DDセンターは、歴史的典籍NW事業の成果をさらに発展させ、後継事業において以上のような研究のハブとなることを目指す所存です。関係各位の温かいご支援とご協力をお願いいたします。

故きを温ねるために

―国立国会図書館のOCR関連事業、特にNDL古典籍OCRについて

国立国会図書館電子情報部電子情報企画課次世代システム開発研究室

青池 あおいけ

亨 とある

二〇二一年度、国立国会図書館は、二〇二〇年末時点で国立国会図書館デジタルコレクションに収録されていた明治期以降の書籍等のデジタル化資料約二四七万点のOCR（光学的文字認識）によるテキスト化を実施した。また、二〇二一年度以降にデジタル化する資料に利用するため、AI技術を用いたOCR処理プログラムの研究開発も併せて実施した。筆者が所属する国立国会図書館電子情報部電子情報企画課次世代システム開発研究室（以下「次世代室」）は、先進情報技術を応用した新しい図書館サービスの調査研究を行っており、これらのOCR関連事業を担当し、また、その成果物の一部を用いた実験サービスの開発を行っている。次世代室の調査研究及びその成果に関する情報はNDLラボ（<https://lab.ndl.go.jp>）から公開している。

OCR関連事業と実験サービスの開発の各取組に共通するキーワードは、「検索性と利用可能性の向上」である。OCRによって作成した全文テキストデータを利用することで、「資料の中身の情報も検索できるようになり、これまで本のタイトルや著者等の書誌データだけでは発見されてこなかった資料に対する手がかりを大きく増やすことができる。

国立国会図書館が様々な資料群を扱う中で、筆者にとって特に強い関心があったのは、著作権保護期間の満了した資料のアクセシビリティを高める活用を促すことであった。オープンデータとなった

過去の資料を簡単に検索できるようにすることで、利用者の知的好奇心を満たし、創作意欲や研究意欲を高めること、また発見した資料を二次利用可能とすることで現代に新たな成果が生み出されることが期待できる。こうした背景から、大部分の著作権保護期間が満了している江戸期以前の古典籍資料全文検索の実現は是非実現したい課題であった。

二〇二一年度のOCR関連事業でAI-OCRに関する多くの有用な知見を得たため、これまでの次世代室における調査研究における知見と組み合わせながら、二〇二二年度は古典籍を対象としたOCR（以下「NDL古典籍OCR」）の内製開発に取り組み、古典籍資料のテキスト化を実施した（https://lab.ndl.go.jp/data-set/r4ocr/r4_koten/）。また、この成果物を利用して二〇二二年十一月、次世代室が開発運用を行っている実験サービスの一つである次世代デジタルライブラリーに古典籍資料の全文検索機能を搭載した。

古典籍のOCR技術として先行する例としては、ROIS・DS人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）の『みを』や凸版印刷株式会社の『ふみの』が挙げられる。これらは、スマートフォン等で撮影した古典籍資料に対してリアルタイムで文字を読み取り、くずし字について専門知識がなくても書かれている文字の情報を把握できるアプリケーションである。こうしたアプリ

ケースの助けを借りて目の前の資料を解説した利用者が、次の段階として「この内容は他の古典籍資料ではどのように記述されているのだろう」といった関心を抱いたとき、古典籍資料を多く所蔵する機関として、その好奇心を手軽に満たせるよう、古典籍資料の全文検索機能及び全文検索によって発見した箇所の周辺に書かれている情報を可視化する機能の実現を目指した。今回実験的に内製開発したNDL古典籍OCRは、学習用データセットとして、CODH及び国文学研究資料館古典籍共同研究事業センターが公開している「日本古典籍くずし字データセット」や、国立歴史民俗博物館等が主催している市民参加型翻刻プロジェクトである「みんなで翻刻」が公開している翻刻成果物、そして国文学研究資料館が公開している古典籍資料の全文データベース等、日本の人文情報学分野において構築され、オープンデータとして公開されてきた様々なデータ資源を活用している。今後、我々も、学習のために加工したデータセットやNDL古典籍OCRのモデルやソースコードをオープンに公開していく



『義経紀 巻5』より「武蔵坊」を検索した画面
<https://lab.ndl.go.jp/dl/book/1287996?page=41>

ことで、オープンデータ活用者としてその成果を還元し、人文情報学分野のデータ資源をさらに豊かにできると良いと考えている。

また、一概に古典籍資料といっても、その刊行年代や文字の形状は多様であり、文字認識性能については今後も改良の余地がある。しかし、現状のNDL古典籍OCRが一部の文字列しか拾えない資料であっても、全文検索できることで、専門家が翻刻作業の対象を選定する際の作業支援等に役立つと考ええる。今後サービスを改善していくためには、古典籍資料の知識を持った専門家との協力が不可欠であると認識しているが、今回全文検索のいわばたたき台を公開したことで、協力の相談が行いやすくなったとも考えている。

二〇二二年十二月二十一日、国立国会図書館デジタルコレクションがリニューアルされた。実験段階である古典籍資料を除き、冒頭に述べた二四七万点の活字資料のほぼ全ての全文検索が可能となった。また、二〇二三年一月十日にはNDL Ngram Viewerも図書及び雑誌約二三〇万点へと検索対象を拡大した。是非その有用性を体感して頂きたい。

最後にもう一つ、次世代デジタルライブラリーやNDL Ngram Viewerを活用して得た興味深い発見をTwitter等で共有・紹介してくださる方々に大変感謝している。AI・OCRをはじめとする最先端の情報技術の力によって実現した検索サービスを利用して遠い昔の知識を掘り起こし、SNSを使いこなした利用者がその発見を互いに紹介する、いわば「新しきを温ねて故きを知る」動きに、筆者はとてもわくわくしている。

『国書総目録』と調査カード情報のデジタル化の展望

古典籍共同研究事業センター 特任助教

幾浦 裕之
いくうら ひろゆき

日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画

(以下、「歴史的典籍NW事業」という。)の成果のひとつとして、二〇一七年四月から公開された新日本古典籍総合データベースは、日本古典籍総合目録データベースと本体を共有しつつ、画像閲覧機能に特化したものである。以下前者を新日本DB、後者を目録DBと略称する。目録DBは、日本全国の古典籍の所在情報を目録化した『国書総目録』(岩波書店、補訂版一九八九〜一九九一年)、『古典籍総合目録』(岩波書店、一九九〇年)に、『国文学研究資料館蔵和古書目録』、『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録』の四目録を統合し、発展させたものである。ここに、国文学研究資料館が新たに収蔵した古典籍や目録、調査収集事業で撮影された画像、歴史的典籍NW事業で登録された古典籍のデジタル画像などが加わっていく。四つの階層からなる巨大な建物に、日々新たに増築されるようなイメージである。二〇二三年三月、両DBが統合され、装いも新たに国書データベースの提供が開始される。

私は以前、当館の資料整理等補助員として宮内庁書陵部編『和漢図書分類目録』(一九五二〜一九六八年)の記載情報をデータベースに登録する業務に従事していた。それまで利用者であったデータベースに、自分が新たな情報を登録し、誰かが必要とする情報の一部となるかもしれないと思ったとき、過去のものである「古典籍」に対するイメージが、未来に向けて受け渡すものへと、静かに大きく変わったのを覚えている。同時に、新日本DB、目録DBが

継承しようとした『国書総目録』自体に関心を持つようになった。

国書データベースで説明すると著作レコード(『古今和歌集』などの各作品)に掲載の「国書所在」という欄が、『国書総目録』の記載情報であり、資料の所在、近代以降の復刻版等の情報が載っている。そもそも目録DBの著作レコードは、『国書総目録』を引き継いでおり、書誌レコードが一件もない著作があるのは主にそのためである。重要なのは、当館が調査収集事業で撮影したマイクロフィルムの複製や、新たに公開されたデジタル画像の古典籍とは、重なるものも、重ならないものもあることである。

私もある作品の伝本の悉皆調査をする際は、「国書所在」情報の部分を手元のWordファイルなどにコピー、貼り付けし、全てオイコミされた情報を見やすく改行し、各所蔵機関の略称を正式名称にするなどして情報を見やすく整える。そして、各古典籍の本文系統、書写年代、書写者などを手がかりにして(『国書総目録』記載情報には各古典籍の請求記号や函架番号がないのである)、目録DBの書誌レコードの情報と対照させる一覧を作成している。この作業で、1『国書総目録』記載の古典籍で画像公開がないものは何か、2『国書総目録』に記載があり、デジタル画像やマイクロフィルム画像、複製で見られる古典籍は何か、3『国書総目録』には記載がないが、画像が見られる古典籍は何か、をはっきりさせる。ここに、4『国書総目録』未記載、デジタル、マイクロ画像もないが、存在が確認される他機関の図書館、デジタルアーカイブ、現在古書店の目

録などにある古典籍も当然ある。現在、誰もが確認できるように
なっているが、研究者以外にはあまり活用されていないのは、1
の『国書総目録』のみ記載の古典籍、つまり「国書所在」欄の持つ古
典籍情報ではないかと考えられるのである。

『国書総目録』には国立図書館等二五件、大学付属図書館等一四二
件、都道府県立図書館等七五件、市立図書館等一一八件、私立図書
館・寺社・個人の文庫二五八件、合計六一八件の所蔵機関・個人文庫
の古典籍の所蔵情報が掲載されている。これら所蔵先のうち、画像
公開が行われていない古典籍は、悉皆調査の上では実見しての調
査、或いは複写の申請が必要とされるものである。所蔵先の所在地
を、グーグルマップの経度緯度の座標情報を記述することで地図
上に表示することができれば、各所蔵先の場所を把握し、調査旅行
の日程や行程を計画する上でもかなり役立つと考えられる。学校
での古典教育上も、所蔵先を地図上で見ることができれば、「古典」
が遠い時代のどこかに浮遊しているのではなく、現実世界の、意外
と近くに古典籍として所蔵されていることを知る機会になるかも
しれない。そもそも各所蔵先の略称は、データベースでは『国書総
目録』の書籍媒体の紙面という物理的制約がないのだから、所蔵先
の名称そのままでも本当は問題ない。見やすく、また各ファイル形
式で取り出しやすいかたちであることも、今後は求められる。

また、ネットでの画像公開がない古典籍も、全く書誌情報がない
わけではない。当館の調査収集事業で調査された古典籍について
は、当館電子資料館の日本古典資料調査記録データベースで調査
カードとして書誌情報を確認できる場合がある。調査カードの記
述情報の密度は当然カードごとに異なるが、検索項目にある所蔵
者名、作品名、編著者名、蔵書印等、序・跋・刊記・奥書等以外にも、表

紙や装訂など、様々な書誌情報がデジタルテキストとして実
入っており、検索窓に入力することである程度ヒットするよう
なっている。調査カードのもつデジタルテキストとしての書誌情
報を、機械可読性の高い方法で取り出すことで、所蔵先ごとの古
籍の装訂や大きさの傾向も、量的に可視化することができ
るのではないだろうか。

以上のような紙面の制約上凝縮されていた目録情報を見やすく
表示したり、所在情報を地図上にプロットしたり、込み入った記述
書誌を検索、視覚化する際に活用できそうなのが、TEI (Text
Encoding Initiative) に準拠したファイル形式である。

TEI は人文学におけるデジタルテキストの各要素(構造)の意
味を、機械可読な形で記述する方法論を議論する協会であり、そこ
で制定された符号化のルール(TEI ガイドライン)である。日本
でも文学研究にコンピュータが利用され始めて三十年近く経過
し、OS の更新やパソコンの買い替えなどで、かつて使っていた
データファイルが使えなくなるといったことは誰しもが少なからず
経験しているはずである。このような問題に対処し、データをでき
るだけ長期間利用し、多角的に活用するための方法が欧米で模索
されてきた。その成果が TEI ガイドラインである。二〇二〇年、
私も永崎研宣氏(人文情報学研究所、現在、当館客員教授)の監修、
岡田一祐氏(当時、当館特任助教)の指導を受け、日本古典籍の書
誌・本文情報の符号化の実践例を作成し、TEI 協会東アジア日本
語分科会のウェブサイト(Github)で公開した。今後は、『国書総目
録』や調査カードに記述された古典籍の書誌情報のデータ化にも、
TEI を活用したいと考えている。

日本古典籍研究国際コンソーシアムの書誌学用語勉強会について

研究部 准教授 **山本 嘉孝**
やまもと よしたか

日本古典籍研究国際コンソーシアムは、二〇二〇年十一月一日に設立された¹。住む国や地域、職種、専門分野、所属機関に関係なく、日本古典籍（一九〇〇年以前の日本で作られたあらゆる書物）に関する知識、情報、問題意識などを気軽に共有できる場を構築している。本稿執筆時点では、八十二の参加機関（日本国内四十一、日本国外四十一）が加盟している。国文学研究資料館が事務局を担当し、コンソーシアムのウェブサイト²の管理・運営も行っている。

現在、日本古典籍研究国際コンソーシアムでは、「書誌学用語勉強会」と「オンライン翻刻・展示分科会」の二つのプロジェクトが並行して走っている。本稿では、書誌学用語勉強会について紹介する。

書誌学用語勉強会は、二〇二二年十月に始動し、二〇二二年十二月に第八回を迎えた。オンライン会議システム（Zoom）を用いて開催しており、新規参加者フォームに一度登録すれば、どなたで

も参加できる³。勉強会の目的は、日本古典籍を対象とする書誌学用語の用語集（グロッサリー）を多言語で構築することである。

目下、国文学研究資料館の展示「和書のさまざま」で用いられている用語の種類・排列を規範としながら、対応する用語・概念の用例を日本語以外で書かれた文献から抄出し、コンソーシアムのウェブサイト⁴に設けた勉強会参加者限定ページ上に集積している。これまで、装訂、数量、構成要素に関係する用語について、主として英語の用例、また少量のフランス語の用例を調査し、地道に検討を重ねてきた。

英語の用例は、ケネス・ガードナー氏による目録に附された用語集、ピーター・コーニツキー氏の単著、北米のCEAL（東亜図書館協会）が改訂した目録作成ガイドライン、鈴木淳氏とエリス・ティニオス氏の共著、佐々木孝浩氏と一戸渉氏によるFutureLearn教材などから収集している⁵。最近の勉強会では、「巻」と「冊」の意味

1 山本嘉孝「日本古典籍研究国際コンソーシアムの設立について」『カレントアウェアネス-E』No.四〇四（二〇二〇年十二月十日）<https://current.ndl.go.jp/e2331>

2 日本古典籍研究国際コンソーシアムのウェブサイト <https://kotenseki.org>

3 書誌学用語勉強会の参加方法 <https://kotenseki.org/online/study>

4 国文学研究資料館「和書のさまざま」<https://www.nijl.ac.jp/etenji/washo>

の区別が、英語よりもフランス語において表現しやすい(かもしれない)という発見、「改装」の語が具体的に何をどこまで指すのかという議論、「合冊」と「合綴」の区別が日本語のなかで標準化されていないのではとの問題提起などがあった。日本語の用語と他言語の用例を紐づける過程で、日本語の用語自体の意味や用法についても、あらためて検討している。

書誌学勉強会は、時差を考慮し、開始時間が交互に朝九時と夜九時(日本時間)となるように開催し、曜日は固定せず、各回について日程調整を行っている。欠席した回については、事務局がまとめたメモや録画をいつでも参加者限定ページで確認し、コメントを残せるようになっていた。国内外の司書、学芸員、教員、大学院生が参加しており、特に司書・学芸員の参加者からは、各機関所蔵の日本古典籍に関する情報提供や、目録作成に係る具体的かつ重要な問題提起が行われることがあり、刺激に満ちている。

それにしても、日本古典籍を対象とした書誌学用語の用語集・用例集を多言語で構築することは、日本古典籍研究にどのような恩

恵をもたらし得るであろうか。まずは、用語や概念の整理が進み、個々の日本古典籍を対象とした研究が更に盛んになればよいと思う。しかし同時に、多言語による用語集・用例集は、日本古典籍の書誌情報をT、E、I化する際にも役立つ可能性があり、日本古典籍の《総体》を研究するための礎にもなり得るのではないか。

書誌情報をT、E、Iガイドラインに沿って構造化すると、書誌情報が機械可読データとなり、統計学的分析や視覚化が可能となる。⁶機械の助けを借りて膨大な書誌情報を解析できるようにすれば、人力では処理しがたい大量の書誌情報を分析することが可能となり、日本古典籍の全体像に関して新たな知見が得られることが期待される。しかし、日本古典籍の書誌情報をT、E、Iに準拠した形にするためには、まず、日本古典籍に特有な書誌学用語の意味や用法がある程度標準化され、また他の言語・文化圏の書誌学用語との対応関係が明らかになっている必要がある。道のりは長いけれども、書誌学用語勉強会の成果が、多様な形の日本古典籍研究を支える日が来ることを夢見ながら、毎月の勉強会に臨みたいと思う。

⁵ Kenneth B. Gardner, *Descriptive Catalogue of Japanese Books in the British Library Printed Before 1700* (London and Temri: The British Library and Tenri Central Library, 1993). Peter Kornicki, *The Book in Japan: A Cultural History from the Beginnings to the Nineteenth Century* (Leiden: Brill, 1998). Subcommittee on Japanese Rare Books, Committee on Japanese Materials, Council on East Asian Libraries, "Descriptive Cataloging Guidelines for Pre-Meiji Japanese Books" (Enlarged and Revised Edition, 2011). Suzuki Jun and Ellis Timios, *Understanding Japanese Woodblock-Printed Illustrated Books: A Short Introduction to Their History, Bibliography and Format* (Leiden: Brill, 2013). Takahiro Sasaki and Wataru Ichinohe, "Japanese Culture Through Rare Books" <https://www.futurelearn.com/courses/japanese-rare-books-culture>

⁶ digitalnagasaki「写本や貴重書等の書誌情報の書き方について(TEL/XMLの紹介)」(二〇一七年五月二十四日)『digitalnagasakiのブログ』<https://digitalnagasaki.hatenablog.com/entry/2017/05/24/223212>

くずし字華ざかり

いま、くずし字を読み解くことが盛んだ。歴史的典籍NW事業で古典籍画像を自在に利用出来るようになったからと言いたい処だが、そればかりではない。「みんなで翻刻」や、AIくずし字認識アプリ「みを」、くずし字学習支援アプリ「KuLa」や豊田高専くずし字翻刻サービス、凸版印刷もAIOOCRで古文書を解読するスマホアプリを開発し、この三月に正式公開するという。それだけ需要があるということか。古典籍や古文書というのは、少し気をつければ身近に多く存在する。お店の看板や美術館に飾られた浮世絵などなど。眼前にあっても読めないのは、解読のための辞書を誰もが持ち合わせていないからだ。だからこれまでは読もうともしなかったし、読むことも出来なかった。それもとえば奈良文化財研究所などが公開する「史的文字データベース連携検索システム」で、これかなという一文字を調べてみるなどで辞書代わりに使えるのかもしれない。同研究所では「ナゾルくん」というアプリもあって、昔の文字をなぞって文字解読の研究に参加してもらう取組も始まっている。いろいろ可能性は拡がりつつある。

くずし字を読み解きたいのは何も国内に限った話ではない。海外にも多くの日本資料が存在し、時折、里帰り展示なども行われているが、海外のキュレーターの方々は大変熱心であり、研究者以上に古典籍に精通している人も多い。たとえば欧州にはEAJRS (European Association of Japanese Resource Specialists) 日本資料専門家欧州協会)があり、国文研との間で覚書を交わし、[NIJL/EAJRS Kuzushiji workshop]を開催しはじめたのは二〇一一年、今西祐一郎先生が館長時代のこと。少し中断もあったが、原則毎年開催されてきた。その熱心なことといったら吃驚するほどだ。熱量半端ない。幾度か講師を務めたが、資料の周辺の知識

についても万全に備えてかからねばと常々思っている。COVID-19流行以前は、現地に赴いての開催だったが、近年はオンライン上での開催となっている。対面とオンライン、双方にメリット・デメリットがあるが、創意工夫次第でなんとかなるものだとつくづく思う。僕自身、このワークショップにより、海外機関に所蔵される古典籍資料について多くの知見を得ることができ、事前準備の際に、HP上での資料への辿り着き方などを教わるのも楽しみの一つだ。僕は出来るだけワークショップ担当機関の所蔵資料を活用して講義をすることにしており、そうした資料に触れる良い機会となっている。オンライン講義で使用したスライド資料や、質疑応答の場面を除いた講義動画などは、EAJRSのスタイリッシュなWEBサイトに、綺麗に整理されアーカイブ化されている。自由に視聴しダウンロードできるので、一度HPを訪れていただければ幸いである。*



「NIJL/EAJRS Kuzushiji workshop」アーカイブ

古典籍共同研究事業センター長

山本 和明
やまもと かずあき

* <https://www.eajrs.net/>

<https://www.eajrs.net/kuzushiji/nijleajrs-kuzushiji-workshop>

こんな古典籍があった！～拠点大学等古典籍画像紹介～第11回

専門機関の典籍も紹介しています。

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。
新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各拠点大学や専門機関おすすめの一点をご紹介します。

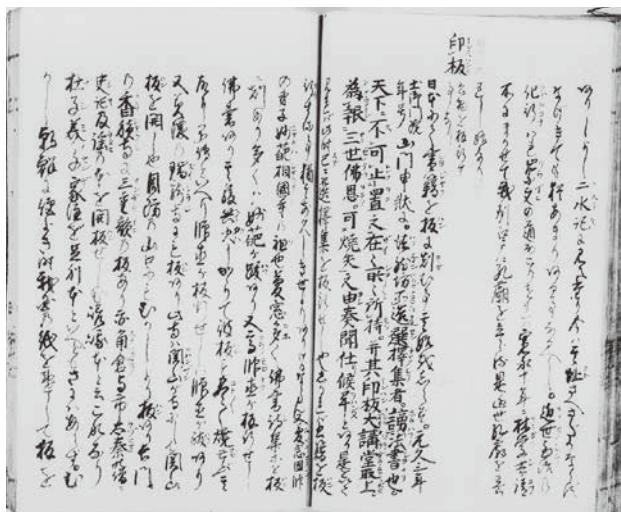
●名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫所蔵『本朝事始』 ほんちゆうしじはじめ

URL : <https://doi.org/10.20730/100001029>

古典籍総合目録DBでは、藤原通憲著とされる同名書(偽書)に分類されていますが、内容は全く異なります。周防山口の伊賀川一儀という謎の人物が、個人的に拵えた類書です。孤本。日本のあらゆる事象について、分類して起源を解説、たとえば、文教門に印板の項目があり、初期の出版について記してくれています。古人でこんな書物を企画するとは、大した物知りですね。本NW事業は、こういった隠れた奇人に光を当てていくこととでしよう。

(名古屋大学教授

塩村 耕)
しおむら こう



(該当部分を見る:
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100001029/viewer/172>)

●研医会図書館所蔵『炮炙全書』 ほうしやぜんしよ

URL : <https://doi.org/10.20730/100387128>

生薬の修治について書かれた本。欄外の書込みには貝原益軒『大和本草』の説明文が引かれ、稻生若水の言葉が記されている。現代でも難しい薬剤となる植物の問題にはひとこと書込みも専門家にとっては貴重なものではあるまいか。牧野富太郎のドラマが放送される今年、植物学・生薬学の参考に古い書物も見えていただきたい。



(該当部分を見る:
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100387128/viewer/30>)

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ
(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html>)を必ずご確認ください。

活動報告

■十一月五日(土)、駿台甲府高等学校において、渡部泰明当館館長が「和歌と遊ぼう」と題し、新日本古典籍総合データベースの資料を紹介しながら、デジタル・ヒューマニティーズの領域に含まれる和歌について高校生へ向けた講演を行いました。

講演に参加した生徒からは、貴重な古典の資料の实物が写真で見られることへの驚きと、和歌に親しみを感ぜられるようになったという感想が寄せられました。



イベント報告

■十一月一日(火)～三十日(水)、オンラインで開催された第二十四回図書館総合展に出席し、新日本古典籍総合データベースおよび関連するコンテンツの紹介、デジタル撮影についての紹介を行いました。現在、図書館総合展に出席したコンテンツをセンターHPで公開しております。
<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/forlibrarians.html>

国文学研究資料館と静嘉堂文庫データベース構築に関する覚書締結

静嘉堂文庫と覚書を締結しました。

今後、静嘉堂文庫が所蔵する古典籍のうち、近世以前の国書でマイクロフィルム化されている資料を中心にデジタル化し、「新日本古典籍総合データベース」により順次公開していきます。*

その他の協定書・覚書の締結

・大阪府立中之島図書館(覚書 十一月四日)

・神戸女子大学・神戸女子短期大学

(覚書 十一月十一日)

三康文化研究所附属三康図書館所蔵資料の一部を高精細デジタル画像でオンライン公開

三康文化研究所附属三康図書館が所蔵する古典籍の一部7点80冊(軸)を六月から「新日本古典籍総合データベース」で公開しました。*

岡山大学附属図書館所蔵資料「池田家文庫」の一部を高精細デジタル画像でオンライン公開

岡山大学附属図書館が所蔵する古典籍の一部62点を十一月から「新日本古典籍総合データベース」で公開しました。*

アドミュージアム東京所蔵の広告の歴史資料をオンライン公開

日本唯一の広告ミュージアムアドミュージアム東京が所蔵する古典籍の一部682点を十二月から「新日本古典籍総合データベース」で公開しました。*

アドミュージアム東京が所蔵する錦絵、古典籍の高精細デジタル画像の一括公開は今回が初となります。

※データベース統合について

二〇二三年三月に「新日本古典籍総合データベース」と「日本古典籍総合目録データベース」を統合した「国書データベース」の提供を開始します。

<https://kokushonijl.ac.jp/>

お悔やみ

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ教授(ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学)が二〇二三年一月五日にご逝去されました。同教授は国際共同研究ネットワーク委員会委員を務めるなど、本事業に対し、多大なご尽力を賜りました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

ふみ 第20号は、

令和5(2023)年

9月発行予定です。

■表題の背景色は支子色(くちなしいろ)です。クチナシの実で染めた色に由来し、紫式部は『源氏物語』のなかで「御れうにあるくちなしの御衣ゆるし色なるそへて」と表現しています。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の「方丈記」(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター

第19号

〈発行日〉

令和5(2023)年2月28日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

T190-0014

東京都立川市緑町十一三

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>



『文明世界宇宙之舵』がご覧になれます。携帯電話又はスマートフォンアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。